

東独の初期社会主義化過程における

文化政策と文学との関係

——形式主義論争を中心として——

岸 繁 一

まえがき

「近代化過程における諸民族の文化」という共同研究の一環として東独を対象に選ぶのは当を得ていないかもしれない。同国はすでに第三帝国以前に高度に近代化を成し遂げ、その段階を越えてむしろ資本主義末期の鬼子であるフアシズムの張本人であったし、第二次大戦以後近代化を要求する第三世界の発展途上国とも条件を異にするからである。しかし近代化を一般的にいわれる資本主義化、工業化に限定せず、社会主義化をも含めるならば、敗戦を契機として東独が歩んできた社会主義化の道を近代化の一方向として顧みることがあながち当を得ないことはないだろう。民族文化という観点からも東独を単一に扱うことには疑問を生ずるかも知れない。東独は世界政治上人為的に分裂国家の隻翼を背負わされ、民族固有の文化は西独と切り離すことはできないからである。文学の領域で東独文学が論じられるようになったとき、それを独立した範囲として扱うべき理由があるかどうか、問題になったことがある。ド

イツ文学といえは従来スイスとかオーストリアとか国籍を問わずドイツ語圏の文学を概括包含してきたからである。しかし文化とは異質なものを同化すると同時に同質なものも異質化する作用でもある。あらゆる面で社会主義化を目指している東独は文学においても西独とは異なった面が出てきていることは否定できない。東独文学という概念は漸次定着してきている。以上の意味で東独を対象にすることは共同研究のテーマに反しないだろう。

社会主義文学は多かれ少かれ社会主義、共産主義のイデオロギーに基づいている。それがイデオロギーの実現した現実社会の反映ではなく、作家の主體的に志向する理想である場合は、その文学的イメージの魅力が読者を深く捉え、ときには革命勢力の結集と前進の大きな推進力になることもある。しかし革命が成功しあるいは他の要因で国家として社会主義、共産主義が現実化する、社会主義文学は現実の国家権力に外部から規制され、作家の主體的要求と葛藤を生じ、理想と現実の深刻な矛盾に陥るのも歴史的現実である。ソ連のことはしばらく措くも、東独では七六年弾き語り詩人ヴォルフ・ビアマン (Wolf Biermann 1936-) が市民権を剝奪された。この事件は西独で喧伝されたばかりでなく東独内にも波紋を起こしたことはまだ忘れられない。また近くは本年六月シュテハン・ハイム (Stefan Heym 1913-) 以下九名の作家が作家同盟を除名されたという報道も奇異にひびいた。この種の事件は過去にも数多くあるのであるが、当局から排除される作家たちが社会主義社会または国家を否定するのではなく強力に推進する立場を堅持しているから事態は複雑である。かかる事情から東独の作家を知ろうとするとその背景にある文化政策が問題になる。それ故その社会主義化過程における初期段階の文化政策と文学の関係を若干ふりかえってみようとするのが本稿のテーマである。

学問と芸術の自由

「ナチの野蛮と奴隷であった十二年後のドイツの文化と精神生活の改革はもつとも基本的なヒューマニズムの要求、すなわち学問研究と芸術創造の自由への要求を余すところなく実現することをこれまでより以上に強く提示する。学問と芸術の自由とは、学問と芸術の利害に関する限り官庁、党、新聞は口をさしはさんではならないということである。この権利を学者、芸術家は無制限に用いるべきである。自分が正しいとおもう研究の道を進む学者の自由、自分自身で唯一に芸術的におもう創作の形式を選ぶ芸術家の自由は侵害されてはならない。それ故正しいか間違っているかについては性急に素人的に判断してはならない。決定的なのは研究の成果であり、業績を自由に競争する芸術家のでき上った創作品である。われわれは芸術と学問の自由がかく解釈され適用されることを知りたい」¹⁴⁾。これは一九四六年二月の共産党第一回中央文化会議における理論家アッカーマン (Anton Ackermann 1905-73) の発言の一部である。これを見ると党の文化政策は柔軟で他の政党と異なるところはない。まえがきで触れたようなことが後、いな現在も行われていることが不思議であるが、少くとも占領下時代はこの方針が貫かれたことは事実である。

ドイツは一九四五年五月八日無条件降服した。戦後の再建はファシズムの排除と民主主義によって新しく出直すことであった。これはポツダム協定で合意した連合国の政策であったし、ナチから解放されたドイツ国民一般の認識でもあった。ソ連占領地区ではいち早くナチの排除が始まり西側地区より徹底的に行われた。民主化の具体的行動は大企業の解体、大土地所有の没収、教育の改革ではじまった。ソ連の軍政管理機関は反ファシズム・民主主義の原則に基づき政治面では四五年六月、七月に四政党の成立を許可した。共産党 (KPD)、社会民主党 (SPD)、キリスト教民主同盟 (CDU)、自由民主党 (LDP) である。共産党はナチ時代ユダヤ人と並んでもっとも激しい血の犠牲を払

った。反ファシズムの先頭に立ちイデオロギーからもソ連占領軍と密接であったのは必然である。しかし社会主義的
改革を目ざすとおもわれた一般の予期に反してソ連体制の導入に距離を置き、議會制民主主義国家を支持した。社会
民主党は伝統的な社会主義政策の実現を企図し、そのために当時労働界に広く瀰漫していた要望を吸収して労働運動
の統一、したがって共産党と合併した党を設立する必要を考えていた。キリスト教民主同盟は以前の中央党（カトリ
ック系）、プロテスタントの保守陣営、民主党の集合で、キリスト教的民主主義的社会政策を表明し、私有財産を肯
定している。自由民主党は戦前の民主党員が指導し、私有財産の維持、自由経済、司法の独立を主張している。この
ような複数政党が占領下で許されたのは将来全ドイツ的發展と議會制複数政党国家を予想させていたが、一方四五年
七月に四党は「反ファシズム・民主主義政党ブロック」(Anti-Fa-Block)を形成した。これは連合、同盟というよ
うな強力な結びつきではなく、ドイツ国民は反ファシズム、民主主義的秩序の確立によってのみ救われるという点で
一致した緩やかなものである。各政党の独立性を相互に認めながら課題を解決しようとしたのである。各政党から五
名づつの代表が出て委員会を構成した。派遣委員は選挙によらず合意で決定された。ブロックは中央ばかりでなく州
郡、市、町、村に至るまで組織化された。

社会民主党が望んでいた労働戦線の統一は時宜を得ないとしてはじめ共産党は拒否していた。ところがグローターヴ
ォール (Otto Grofelowohl 1894-1964) の率ゑる社会民主党の中に変化が起る。シュエマーハー (Kurt Schumacher
1895-1952) を党首とする西側地区の社会民主党が共産党の覇権を怖れて統一に反対し、それに呼応してソ連地区の
社会民主党も壊疑的になったのである。それとは逆に孤立化を怖れる共産党は急に統一に熱心になった。四五年十二
月共産党と社会党の代表各三〇名によって統一問題が話し合われた。社会民主党の代表の中から反対意見が出ると占

領軍機関から圧力がかかり、また共産党は社会主義へ至るドイツ独自の道を強調し、ソ連のスターリン体制とは一線を劃する印象を与えたので、グロテテヴォールは遂に賛意を示した。西側地区では統一について選挙が行われ八〇パーセント反対で否決されたが、ソ連地区では選挙は禁止された。四六年四月合併の党大会が開かれ、社会主義統一党（SED）が正式に発足した。党幹部として両党より七名づつ対等に出て中央書記局が構成された。ソ連寄りを否定した共産党の政策はそのまま持続されたが、現実の政治は占領軍管理のもとにあるのでその代理的役割を果すところまると同時に一方では行政、警察、経済、マスメディアのあらゆる領域における重要ポストはSEDの掌握するところとなる。また党内闘争によって当初対等であったSPDの勢力は次第に減じ、ウルブリヒト（Walter Ulbricht 1893-1973）とそのグループがヘゲモニーを握り、事実上は共産党優位のSEDが形成されていく。いわば変形共産党である。

政党以外に大衆組織団体が結成された。「自由ドイツ労働組合同盟」（FDGB）がすでに四五年六月に創建されている。当初は企業協議会があって労使の区別があった。しかし四八年十一月の組合幹部会議が開かれたとき、組合の伝統を廃止し、計画経済実現が組合労働の中心になるべきだと声明した。それに反対する企業協議会は解消せしめられ、組合同盟はソ連の模範に従って大衆組織としてSEDの政策の実施を代表するもつとも強力な政治勢力になる。四五年七月「民主的ドイツ改革のための文化同盟」（KBE）が学者、芸術家、インテリ等文化にたずさわる人々を集合した。また四五年九月ホーネッカー（Erich Honecker 1912〜）の指導のもとに中央青年委員会が纏められ、それが四六年三月には「自由ドイツ青年団」（FDJ）として結成され、同じように四五年に構成された婦人委員会が発展して四七年三月に「ドイツ民主婦人連盟」（DFD）が結成された。これらの団体もすべてアンティファ・ブ

ロックに加盟した。

CDUは土地改革（百ヘクタール以上の土地所有は没収）に反対して軍政司令部からその指導者が更迭せしめられた。四六年一〇月の州議会選挙では四分の一の票を獲得し、州政府、州議会においてSEDの優位を阻害しようとした。LPDもソ連地区におけるすべての変化を阻止しようとして社会主義のすべての形式を非難した。このような両党の抵抗を中和化するためにSEDは四七年アンティファ・ブロックと並行して人民大会（Volkskongress）運動という新制度を作った。四七年モスクーとロンドンで占領四カ国の外相会議があり、ドイツ管理について明瞭に対立が露呈してきた。SEDは人民大会運動を通じてソ連の態度を支持した。四七年十二月にブーク（Wilhelm Pieck 1876-1960）〔SED〕、キェルツ（Wilhelm Külz 1875-1948）〔LPD〕、ヌッシュケ（Otto Nuschke 1883-1957）〔CDU〕の三名で人民大会の常任委員会が作られた。

この人民大会以外にさらに新しい政党が創立されて、CDU、LDPの勢力を弱める工作がなされた。四八年六月創立の「ドイツ国家民主党」（NDPD）四八年四月創立の「ドイツ民主農民党」（DBD）である。党首は両党とも元共産党員である。NDPDは旧将校、重要な地位にいなかったナチ党員、市民層を結集し、DBDは党名通りである。両党はSEDのいわば衛星的政党として機能した。四八年三月に開催された第二回ドイツ人民大会で選ばれて、SEDの指導する常任協議会となる「人民評議会」（Volksrat）が成立し、新二党を評議会のメンバーに入れた。

以上簡単な占領下における政党、及び大衆団体、それらの組織化過程を見ても、ソ連占領軍の権威を背景にSEDが政治権力の中になっていくことがわかる。共産党の当初の文化政策の柔軟性はカモフラージュとして西側から非

難されるのであるが、それは別問題として芸術家、作家、学者などの集まった「文化同盟」は超党派の性格を持ち、民主的に国家を再建しうるだろう、それに力を尽そうという樂觀的希望を抱いていた。メキシコ亡命より四七年に帰国したアンナ・ゼーガース (Anna Seghers 1900～) は「私は東地区に入った。そこで私の仕事、なしうる私の仕事、新しい社会とひとりひとりの人すべてのまわりに行われる戦いの中で利用され歓迎されることを確信したからである」と言っているが、文化同盟に結集したインテリ層一般の自主的決意を代表しているだろう。

アッカーマンと同じく党の文化会議で演説したピークは亡命文学とドイツ古典文学によってヒューマニズムを再生しようとしている当時の文学界の一般的傾向を支持し、文化同盟の方向づけをして、「再建に意欲的な反ファシズムと民主主義勢力のすべては、どの党派、宗派に属せようと、労働者であれ、インテリであれ、農民であれ職人であれ同じであるが、大同団結してすべての文化創造者の実績、能力を持つ大きな統一を基礎づける時である。そのような統一の基盤と真に闘争的民主主義の精神とにおいてのみドイツの文化生活の改革が実際に突りある方法で成し遂げられるからである」と言っているが、闘争的民主主義という方向はまだ一般的ではなかった。四六年頃の作家たちは多く同僚に対し和解的で、ゲート、シラー、ハイネ等永遠の価値に逃避する風潮だった。四七年には西側でトーマス・マンをめぐる国外亡命と国内亡命の論争が起こった。東地区では大部分の人はトーマス・マンを擁護した。フランスから実存主義論争が入ったがまだ共產主義が一般化していないのでそれに対応する方法を知らなかった。十月に第一回作家会議が開かれた。全ドイツ作家会議はこれが始めて終りだった。「文化同盟」の会長ベッヒャー (Johannes Robert Becher 1891-1958) は全ドイツを意識しながら文学と政治について論じ、第三帝国を指摘して「政治的要求に屈して国家指導の一種の正面玄関になることが文学から要請される経験をした。文学はそれ独自の方法で政治的にな

らなければ政治が文学を呑み込んでしまふだろう」と言っている。この会議では「社会主義リアリズム」という言葉がさかんに用いられたがまだ一般の作家、詩人には理解できなかった。ベルリンの西側地区では「文化同盟」は共産主義的であるとして禁止された。西側からの挑戦である。文化的統一の崩壊の始まりである。

四八年半ばにドイツ経済委員会によって「半年計画」が実施された。ドイツで始めて計画経済の行われた年である。つづいて四九・五〇年を指す「二カ年計画」がSEDの党幹部によって立案決議された。生産を三〇パーセント引上げようというのである。この目的に達するために四八年にソ連の模範に従って模範労働者運動が展開された。鉱山労働者アドルフ・ヘネケが十月には石炭採掘で一日のノルマを三八〇パーセント果した。模範労働者運動はヘネケ運動ともいわれ、生産高上の拍車となった。これを背景として文化政策でも二カ年計画参加が要求され、九月に作家、芸術家の労働会議が催された。その席でウルブリヒトは「企業再建の戦いがどのように行われているか、というテーマを作家はなぜ選ばないのか。企業家と若干の人々が追放され、どのようにもうれつな苦勞をして再建がなされたか、そのさいどのような人間の運命が露呈したか、はじめは新秩序に同意しなかった技師がどのようにして次第に協力しはじめたかを示すことは非常に興味深いテーマである。……企業内のこの戦いを描き、その人間を作品化するものが扱われねばならないテーマである。……二カ年計画においては純粹に經濟的問題が重要ではなく、根本的な社会的変革を遂行し、二カ年計画の戦いと連関して新しい進歩的文化を戦いとることが重要である。もっとも大事なことは人間を変えることである」と発言している。芸術と学問の自由は確保されねばならないという路線は崩されていないが、すでにSEDがあらゆる面で権力化し、文化を政治に服従させるべく、作家たちをも批判の対象にした始まりである。SEDの文化政策のルール切替えであり、この路線が今後の基調になり、ある意味では現在も続いている。

るといえる。アーノルト・ツヴァイク (Arnold Zweig 1887-1968) がパレスチナから帰り、作家は非政治家だと言
い、ベルリンの分裂の姿を歎いたが、もうアナクロニズムであるほどに時代は変化していた。

一九四七年から徴候を示した占領国間におけるドイツ管理の対立は四八年の通貨改革、ベルリン封鎖を経て決定的
となった。四九年九月米英仏占領地区に「ドイツ連邦共和国」(BRD)、つづいて十月ソ連占領地区に「ドイツ民
主共和国」(DDR) がそれぞれ正式に成立した。DDR樹立を宣言した人民評議会は「人民議会」(Volkskammer)
と改称された。これは西独の連邦議会 (Bundestag) に相当する。人民議会の構成は当初議員総数三三〇名である。
その内訳はSED九〇名、CDU、LDP各四五名、NDP、DBD各一五名である。残り一二〇名は大衆組織団体
等から補充される。すなわちFDGB三〇名、FDJ、DFD、文化同盟、ナチ追放者連合各一〇名で、残余は個人
資格議員である。(この議会構成は後議員数が増加〔五〇〇名〕し、個人資格の議員は消滅するなど若干変化しているが、今日も
続いている)。

さらに西独の連邦参議院 (Bundesrat) に相当する州参議会 (Länderkammer) が設立される。これは当時東地区
の五州議会から代表が派遣され三四名の議員から成る。内訳はSED一七名、LDP九名、CDU七名、農民相互扶
助会 (VdGB) 一名である。人民議会と州参議会の合同会議で大統領が選出され、ピークが就任した。大統領の権
限は制約され、ほぼ西独のそれと同じである。人民議会はグローテヴォールを首相とする一四名の閣僚を承認し、最
初の政府が発足する。すでに三月人民評議会において可決された憲法が建国と共に効力を発した。憲法は「あらゆる
国家権力は人民から発す」(第三条) と規定し、「国家権力は人民の福祉、平和と民主主義的進歩に奉仕しなければな
らない。公務にたずさわる者は全体への奉仕者であって党への奉仕者ではない」と附言している。さらに市民の基本

権（言論、集会、宗教、通信の秘密など）を保証している（第八、九、四一条）。この国家体制の骨組を見ると西側ブルジョア民主国家と変るところなく、「国家最高の機関は人民議会」（第五〇条）であるとして、議会制複数政党国家を維持している。

しかし四九年五月の第三回人民大会から導入された統一リストによる選挙で議員は選ばれているから西側の自由選挙に依るものとは性格を異にしていることは明らかである。議会内における政党間の力関係、大衆組織団体の議員はSEDの党员であるところから見てもSEDの絶対多数と政治的発言力は圧倒的である。外見上は議会制であるが實質的には一党支配であり、しかも党内の権力闘争に打克ち、スターリン体制を模倣したウルブリヒトの独裁体制が強化されてゆく。その過程でもっとも顕著に目につくのは五二年に州が県に改められたことである。五州がベルリンを含む一五の県に分割され、地方の自治権が分散される。県議会は人民議会の小型相似形であり、下から民主的に政治権力を構成するよりも、上からの政策を下に伝え、実行する機関として機能し、ピラミッド的中央集権体制が整えられる。有名無実となった州参議会はしばらく続くも五七年に自主解散している。また大統領制も初代ビークの死と共に六〇年には解消され、新たに国家評議会（Staatsrat）が設立される。議長、議長代理六名、評議員一六名、書記の構成である。評議員は大都市の市長、党幹部、科学研究所などの所長、農業生産組合や人民経営企業などの長であるが、大統領よりも権限を拡充した議長が実権を握り、大統領に代る国家元首である。SEDの第一書記であったウルブリヒトが兼任して、党と国家の一体化は名実共に完了し、ウルブリヒトの独裁体制が頂点に達する。このような政治体制を背景とした文化政策は文学にどのような影響を与えたらうか。

形式主義論争

DDRが正式に発足する前ではあるが、四九年一月SEDの第一回党議 (Parteikonferenz) の決議の中で二カ年計画遂行に連関して作家、芸術家への要求が掲げられている。「われわれ人民の進歩的勢力はより高い社会秩序に向って労働する人間の生活と努力の創造的作品化を作家、芸術家に要求する。二カ年計画の達成、ノルマ以上の達成を確保できるのは偉大な大衆イニシアチブのみであるので、それはこのようにして共同作業のうちに展開されるだろう」⁽ⁿ⁾。この創造的作品化の具体的内容は「文学、学問、芸術の中にあるナチズムの残滓はただ尖鋭な戦いによってのみ克服される。独占資本主義体制の崩壊のみを反映するネオファシズム、デカダンス、芸術の形式主義的自然主義的歪曲の現象をも和解しがたく戦われねばない」⁽ⁿ⁾。さらに「新しい社会の認識と労働への新しい態度を持つ人間を教育するという文化課題はすべての作家、芸術家がこの仕事に全力と全情熱を傾げるときにのみ達成されうる」⁽ⁿ⁾。そうすれば、「進歩的作家は作品によって企業の労働者と働く農民に労働の喜びとオプティミズムを伸長する寄与をなすだろう。作家の作品は二カ年計画とそれに連関する社会的結果のすべての意義と重要性を全人民に伝え知らせるだろう」⁽ⁿ⁾。これを見ると党の文化政策には二方向あることが認められる。一方は資本主義体制との戦いであり、他方は労働者に教育者として臨み、作品を通して労働意欲を昂める、いわば労働者との一体化である。前者は米ソを両極とした東西ブロックの激化する冷戦、後者は社会主義化への困難な国内条件を反映する。特に作家の多くは社会状況や政治の進行より遅れていた。そのため労働者、農民の生産意欲を昂めることに寄与せよという要求は文学を教育、アジテーションの道具にするものと映った。たとえば、この党の文化政策を説明するにあたってグローテポールはすぐれたオプティミズムの作品を書く作家には、ソーセージ、住居、石炭配給証明書に特別の顧慮を払うと言ったとき、居

合せた作家達は啞然とした。カントーロヴィチュ (Alfred Kantorowicz 1899)。アメリカ亡命、帰国後フンボルト大学教授、五七年西独へ移住) は敢て発言し、それは大衆の生感情を高め、芸術的感受性を深めることにはならない、「労働の生産性を引上げるための補助手段」にすぎない。西側の企業はそれに対してはもっと高額を支払っていると皮肉まじりに抗議したという。党の文化政策は作家、芸術家に簡単には受け入れられない状況を示している。しかし党が国家権力と等しなみになって以後も文化政策のこの二方向は維持強化され、文学、芸術と鋭く対立する場合も起こってくる。五〇年代のそのような対立を示す現象を大別すると、資本主義体制との戦いの系列では五一年を頂点とし前後に起こっている「形式主義論争」、五六年のハンガリー暴動事件を背景とした「修正主義論争」である。労働者との一体化系列では二カ年計画より始まる「労働英雄」の問題、それに継統して起こった「ビッターフェルトの道」(Bitterfelder Weg) 運動(五九年より)である。本稿では形式主義論争に焦点を当ててみたいとおもう。

形式主義 (Formalismus) 論争の背景には厳しい冷戦があることはいうまでもない。ドイツの分裂と平行してアジアでは朝鮮民主主義人民共和国(四八年)、中華人民共和国(四九年)の成立により共産主義の脅威が西側では大きく喧伝され、東西ブロックの色分けが明確になり、その対立は激化する。ついには朝鮮戦争勃発(五〇年)によって第三次大戦の危機が叫ばれる。両陣営とも世界平和のためと宣伝しながら戦争への傾斜は深まる様相を呈する。西ブロックが西独の再軍備を日程に上らせようとするに至り、東ブロックの最前線として東独は兄弟国と深刻な敵対関係に入る。社会主義国家建設を旨とす東独にとってはアメリカナイズされた西独からの文化的影響は建設を阻む大きな障害である。西独の情報電波を通じ、また開かれた国境、西ベルリンを通じて自由に東独に入ってくるからである。文化政策上西側の帝国主義的イデオロギーと対決する必要を急務とした。そのキャンペーンが形式主義との戦いに

集約されたのである。この運動はすでにソ連から導入された社会主義リアリズムの主流化と共に四九年頃より起っていたが、五一年三月SEDの中央委、第五回会議で全面的に取上げられ、党の決議とされるに及んで単なる一部の文化運動の域を越え、国家権力として拘束力をもってくる。特に「芸術問題国家委員会」が新設（七月）され検閲制度が強化されるとともに、波紋が大きくなったのである。

先に中央委決議の要旨を挙げてみよう。はじめ型通りにこれまでの文化政策上の成果を謳いあげているが、それにもかかわらず文化領域は経済的、政治的領域に比して著しく立ち遅れていると咎めている。そして第三回党大会（五〇年七月）におけるベッヒャーのこの咎めを裏書きする発言を引用し、文化面の停滞の主原因を「形式主義の支配」にあるとしている。形式主義者は決定的な意義が作品の内容、イデー、思想にあることを否定する。かれらの解釈では芸術作品の意義は内容ではなく形式から成り立つとしている。形式問題が独立するところでは芸術はそのヒューマニズムと民主主義の性格を失い、抽象へ導いて客観的な現実認識を媒介しない。芸術そのものの墮落であり崩壊である。形式主義の重要な特徴は完全に新しいものを展開するという口実のもとに古典的文化遺産と完全に断絶しようとするところにある。その結果国民文化を根絶やしにし、国民意識の破壊へ導く。さらに世界主義（Kosmopolitismus）を促進し、アメリカ帝国主義の戦争政策に直接加担する。なぜなら世界主義は帝国主義イデオロギーの武器であり、各民族の固有の文化と国民意識を破壊する。芸術上の形式主義は何よりも伝統文化の破壊と国民意識の喪失に大きな役割を演じているからである。さらに形式主義は人間的なもの、芸術の大衆性に背反し、芸術は人民に奉仕しなければならぬという原則を放棄している。芸術と芸術家を人民から孤立化し、神秘的なもの、秘儀的なもの、超自然的なものを讚美する。資本主義の帝国主義時代の崩壊現象である。暴力、反動、卑俗、殺人、惨虐、ポルノグラフィ

讚美の現象もこれに属する。そしてDDRにおける現在の形式主義的芸術の例を絵画、彫刻、建築、音楽、オペラ、オペレッター、キャバレー、人形劇に至るまで列挙している。つづいて帝国主義的文化破壊者が大衆の意識を毒する武器としているキツチュ (Kitsch) を非難し、ポルノグラフィ、スリラー小説、低俗小説、犯罪映画がその表現であるとする。これによって帝国主義は戦争の火付け政策の具体的機能を果させている。なおソ連で一九一七—二三年の間に起った「プロレタリア文化派」(Proletkult) を排斥している。この派の芸術は形式を完全に無視し、内容のみを規準として文化遺産との結びつきを否定する点が根本的な誤りと指摘している。(この派は党のコントロールを脱しようとしたためにソ連では三年に解散せしめられている)。最後に文学における停滞にも言及し、形式主義に替るリアリズムの発展を強調し、広汎な批判、自己批判が停滞克服の重要な鍵であること、マルクス・レーニン主義とソ連文化の学習、社会的組織機関における芸術家の協同作業、企業との結びつきが強調され、後進の教育の改善を要請している。⁽⁹⁾しかし何よりも形式主義排除に象徴される西側文化、アメリカ化された西独文化の影響との対決がこの中央委員議の主眼点である。

西側が共産主義の覇権を怖れるに對抗して東側は資本主義イデオロギーとして世界主義の脅威を強調する。東独の立場から見ると、世界主義は東独とポーランドとの新しい国境、オーデル・ナイセ線に反対する西独の態度、その国家主義的報復主義的態度に結びついており、世界の警察を気取るアメリカから発したものである。アメリカはヨーロッパと大西洋は一つであるという理念を作り出し、北大西洋条約(NATO 一九四九)を多くの国と結んだ。これらの国の進歩的勢力の反対はこの理念によって圧迫されたのである。世界主義はもともとブルジョア文化の台頭期に世界市民性として各民族国家の進歩的勢力の共同努力に起因した。しかし今日では当時の理念からはるかに遠去かつて

しまっている。「現在の世界主義はドイツ古典主義作家とならん関係はない。それは国民文化の具体的な等高線を抹殺し、独占のがまんならない抽象的な『有用性』を措定している」というブレヒト (Bertolt Brecht 1898-1956) の言葉に的確に表現されている。西独はこの世界主義に影響され毒されている。その証拠は五〇年代に入って西側帝国主義の文学の翻訳が氾濫し、末期ブルジョアの危機意識が宣伝されている。ベン (Gottfried Benn 1886-1956) のような詩人が文学の権威となり、他の帝国主義国へ逆影響をしている。「叙情詩の問題」の中でベンは形式を神格化し反民主文学のプログラムを作成した。これは西独の中の批判的リアリズム文学を退け社会的無力と純粋な形式文学の実験を助長し、末期ブルジョア文学の再生に力を与えた。そののみか、末期ブルジョア文学が濫用されている。その重要な文学は帝国主義体制と人間の尊厳が犯されることに絶望的に反抗した。それが今必然的な社会変化とそれを支持する文学を抑えるために利用されている。たとえばカフカがその場合である。カフカ文学のブームは戦後アメリカに急速に起こったが、それは数年続いて四〇年代の終りには下火になった。しかし西独ではそれ以後がカフカブームの頂点となり、カフカ論文のない雑誌はやってゆけないというほどの盛況を現出した。これを見ても末期ブルジョア文学の伝統を帝国主義イデオロギーに従属させようとするアメリカ資本主義の戦略的操作のやり方がわかる。西独の文学と文学批評はカフカ文学の中に強く表現されている抑圧感情、すなわち帝国主義体制の中に引き渡されているという感情をもちや変えられない運命にまで絶対化した。世界を迷路と見なし、世界を動かす原動力と法則性を不可解とし、その世界から逃れる道はないという感情は権力に対する人間の無力の表明である。それは末期ブルジョア社会を復興しようとする西独の権力者の政治目的遂行に迎え入れられた。さらに政治に参加する作家の言葉の無力、無影響に対する確信を与え、民主的基盤を喪失させた。それに応じて文学の形式の独立が生じたのである。文学批

評はこぞってリアリズムの創作を攻撃し、時代遅れとけなしている。これが当時の西独の文学発展の基本方向である、というのが中央委決議の背景である。⁶⁰⁾

この決議が指導的声明または警告であり、一般に広く批判、自己批判を起すためのキャンペーンにとどまれば問題はなかったろうが、それ以上に行政処置として干渉するに至ったために形式主義論争は芸術家、作家にとって厳しい冬となった。そのうちで目立った事件を挙げると、ベルリン、その他の芸術大学の指導的芸術家たち（ホルスト・シュレムベル、カール・クロードル、アルノー・モール等）の絵画が形式主義と非難された。中でもシュトレムベル（Horst Stempel）が描いたフリードリヒ・シュトラッセ駅の壁画は進歩に忠実な労働者を描いていないとして上塗りされてしまった。画家は西へ移住した。五一年暮れから「芸術アカデミー」主催のバルラハ（Ernst Barlach 1870-1938 彫刻家、作家）展示会は期間を短縮された。バルラハは人間の苦しみがいかに克服されるかが解っていない。かれの彫刻は灰色で、受動的絶望的な、動物的鈍重にうごめき、抵抗を知らない人間の群像である。なんの希望も持たないルンペンプロタリアの層しか彼は描かないとして否定されている。⁶¹⁾ 文学関係ではアーノルト・ツヴァイクの小説「ヴァントベクの斧」の映画化がベシミスチックだとして上映禁止された。レン（Ludwig Renn 1889～）の「スペイン戦争」は描写が客観的すぎるとして出版禁止。カントーロヴィチュの「連合軍」もスペイン内乱のレジスタンスを扱った劇であるが連合政策の変化状況にわずかにしか反対していないとして上演を拒否されている。ブレヒトの劇「アンティゴネ」は形式主義の典型、「母」はプロタリア文化派だと決め付けられた。アイスラー（Hanns Eisler 1898-1962）の歌劇「ヨーハン・ファウストゥス」は十六世紀の農民戦争を背景としたものだが、ドイツ史を余りに悲惨に描いていると攻撃され、アイスラーに作曲の続行の気を失わせた。なおブレヒト、デッサウ合作のオペ

ラ「ルクルスの訊問」も上演を途中で禁止された。このオペラの主人公ルクルスはアジアで侵略戦争をしてローマ帝国を拡大した將軍である。美食、多食家でもある。筋は將軍の埋葬から始まっているが、下界で裁判を受けることが中心になっている。陪審員は貧しい者や被略奪者の幽霊である。ルクルスに殺害された者たちが原告として登場する。弁護人は將軍のコックと征服者の命令で桜の木をヨーロッパへ移植した園丁だけである。死者たちの裁判は將軍を極楽浄土へは行かせず、無間地獄へ落すことになる。終曲のコーラスは判決を下して、「かれを無間地獄へ！」で終る。ブレヒトはこれを十二年前ラジオ・ドラマとして書いた。当時はドイツファシズムとの戦いを地下に移し、すべての侵略者の不可避の終末の予言を象徴的にばかして描くことは正しいようにブレヒトにはおもわれたろう。しかし一九四〇年頃でもこの文学的象徴は歴史的情況の頂点に合っていない。今日では明らかに現実に即していない。ソ連の指導の下に八億以上の（中ソ密月時代が背景）世界平和の陣営は闇の裁判どころか、あらゆる戦争犯罪人を地上の裁判に付する現実の権力を持っている。ヒトラー戦争の始まりに故郷を失った反ファシスト作家の不安定な位置の表現として理解できることは一九五一年には有効ではない。これが中央委を代弁した新聞記事の要旨である。上演の際観客層からの大衆弾劾が起こると予期し、またそのように工作した中央委の意図に反し、終ると喝采が止まなかったという。観客はルクルスにスターリンを見たのである。ブレヒトは作品を書き換えねばならなかった。

このような中央委、特に芸術問題国家委員会の決定は芸術家、作家に理由を知らされずに下される。その責任と権限の中心はヴェールを被っている。カントーロヴィチュはそれがある手紙の中で伝えている。「われわれの国ではカフカの雰囲気が発生してきた。本当のことだが、これまで私にとっては入りにくかった『審判』の著者の天才がごく最近のいろいろな経験によってやっとよく理解できるようになった。それは無気味な現実化である。決定が下される

が、それについてわれわれはわからない。審議が行われるが審議機関のメンバーは知らされない。どこかに書類はあるが、それに何が書かれているかわからない。判決は未決のままである。必要なとき誰に訴えてよいか謎である」⁶⁴。めぼしい人に訊いてもとぼけた返事以上はかえらないと言っている。カントーロヴィチュはすでに以前から当局に睨まれていた。彼の出版する雑誌「東と西」(一九四五—五〇)はすでに四八年に発行停止を喰らいそうになった。表題からして当局には面白くなかったのである。しかしむしろ占領軍司令部から救いの手が伸びてなおしばらく発行できたのである。劇「連合軍」も司令部の勧告で一旦は「ドイツ劇場」で幕が上げられたのである。ソ連側よりドイツ内の方が厳しくなったのである。カントーロヴィチュはともかくもブレヒトにまで攻撃の矢が向けられたことは情況がいかに異常であったかを示す。五一年八月「芸術問題国家委員会」を招集したとき、首相グロテヴォールは演説の中で「文学と造形芸術は政治に従属する、しかし政治に強力な影響を及ぼすことも明らかではある。芸術における理念は政治闘争の進軍方向に従わねばならない。なぜならば政治のレベルにおいてのみ就労する人々の要求が正しく認識され実現されるからである。政治の中で正しいと証明されることは芸術においても無条件に正しいのである」⁶⁵と宣言している。四六年の芸術と学問の自由を全的に認めたアッカーマンの発言と比較すると一八〇度の転換である。党が国家権力を掌握した自信の現われか、それともイデオロギーのみが独り歩きしている現われなのか、おそろく楯の両面を現わしているのだろう。多くの作家たちは驚き、迎合的に悪いアジ・プロ文学を書くか、歴史的素材や児童文学に逃避した。そうでなければ沈黙した。五二年五月第三回ドイツ作家会議では文化同盟と独立して「ドイツ作家同盟」(der Deutsche Schriftstellerverband) が創立され、組織的強化が計られた。

上から強制された形式主義論争は理論的には多様な側面を持っている。最近東独から出版された「ドイツ文学史」

「DDRの文学」(一九七六)が時間的距離を隔てて整理しているので、これに従って見てみよう。

形式主義という言葉はこの論争を示す概念としては適切ではない。形式問題のみを重視するかのように見えるからである。実際には芸術家、作家の抱いている政治観、世界観も含まれている。その面からはヴォルフ(Friedrich Wolf 1888-1953)が朝鮮戦争、原子戦争の脅威、西独の再軍備に対する西側作家たちの興味な態度を批判し、その自由のデマゴギーを暴露した。また西側諸国の文学作品や映画の中にある惨劇テーマを攻撃し、作家の世界像人間像がその作家の有能無能を決定するとして問題の核心に触れている。また当時特に若い芸術家の間に古典的遺産に基づくのは亜流に墮する危険があると論じられた。これに対して詩人ヘルムリン(Stephan Hermlin 1915-)は抗議した。そのような危険はない。むしろ過去の巨匠から学ばないのは危険である。ルネサンスや古典主義の亜流はわが国には存在しない。フランス、ドイツのモダニズムの亜流が無数にいても独創的だと称讃されている。ヘルムリンはこのように論争の一面を明確にした。末期ブルジョア社会のモダニズムに対してソ連の優れた芸術作品から学ぶことを第五会議は方向づけているが、それと並行してブルジョア・リアリズム芸術、民衆芸術が取り上げられ、評価された。文学においてはそれに呼応して理論的に新しい社会状況についての認識にメスが入れられた。ゼーガースは過去にはなかった読者層の拡がりを挙げて、作家の新しい社会的責任、労働者大衆の中の作家の位置に注意を向けた。ベッヒャーは「文学社会」を提唱し、文学と読者、観客を含めたアンサンブルを主張し、文学と社会の自覚的に均衡のとれた発展を思考した。

形式主義論争に附随したイデオロギー、芸術家、作家の態度についての問題が明らかにしたことは従来のブルジョア的な観方、すなわち文学を文学世界内部の出来事、文学の孤立から脱却することであった。この観点から内容と形

式の関係についての複雑な問題が答えられている。ヴォルフは作家の生感情と才能、すなわち表現力が生じるのは内容であるとし、作家の中にはしばしば素材と格闘し、未完のもの、形式的には成功していないものを提出している。までいっている。この点はDDR文学反対者から攻撃された。芸術的進歩は新しい内容にあるか、形式の新しいにあるかという問題がこれに関連して論じられた。ブレヒトは内容と形式の分離、末期ブルジョア社会のモダニズム芸術における形式の独立化を鋭く分析し、「新しい内容のみが新しい形式に耐える」とし、「社会の基盤が変革されるわれわれの国ではあらゆるところに新しい形式となって反映している生活は古い形式の文学によって作品化されえないし影響もされない」、と主張した。これに対してベッキヤーは「真に新しいものが伝統的な形式で表現される場合もある。その新しさは形式的には目立たず因習的に現われるが、容易に理解され、文学的に先例のないものへの入口を見出す可能性を作っている。また真に新しいものが形式的突飛さによってわれわれを刺戟し、矛盾を挑発することにより実験的に表現される新しい様式をわれわれに試す場合もある。そのようにして新しいものとの出会いと知識がえられる」としている。このようにDDRの指導的作家たちはそれぞれアクセントは異なるが内容と形式との一致及び内容の優位を強調した。

以上のように文学史は形式主義論争の積極的成果を集約している。DDR文学の大御所作家たちを引用して論争の歴史的意義と価値を客観的に位置づけている。さらに論争の否定的側面をも卒直に認め、それが引き起こした波紋にも触れている。しかしこの問題に記述が移行すると非常に用心深い配慮が行なわれていることに気づく。その第一は、指導的作家たちの積極的成果が論争全体については言えないとし、「正しい立場を得よう」と意図しながら誤った尖鋭な解釈に至り、それが第五回会議決議の実現にさいして否定的な影響をおよぼした。特に新設された芸術問題国

家委員会の活動にはいくつかの誤りが示された」と述べている点である。この記述は論争の否定的側面の責をSED中央委にはなく新設の検閲制度に帰そうとしている。これは主客逆転である。中央委の決議が新しい制度を設立させたのであり、その逆ではない筈だからである。結果の悪役を芸術問題国家委員会にのみ引き受けさせ中央委を無傷にしておく配慮が払われている。「誤った尖鋭な解釈」というのは、文学史の記述通り、芸術を生活に密着させようとして、芸術上の典型的なもの、模範的な労働英雄の概念を余りに狭く考え、その規準に合わない芸術・文学作品を、その内容と作者の政治的世界観の立場を無視して、性急に形式主義的だと非難したことである。社会主義リアリズム文学に深く根ざす指導的作家たちはそのような急進的形式主義排撃に対決したとしてベッヒャーの中央委第五回会議の発言が引用されている。それは形式主義反対を唱えながら知らず知らずに自分自身が形式主義者になっていること、また西独では擬似リアリズムの手法を用いて戦争文学が書かれていることを見落してはならないという警告である。文学畑の権威であり中央委員会の一員であるベッヒャーの言が引用されること自体は当然であるが、第五回会議でそれが容れられなかった理由は触れられていない。ベッヒャーと同じく委員であったアーノルト・ツヴァイクはブレヒトの「ルクルスの訊問」を大いに弁護したが排撃派からアナキーであり、芸術的創造の領域における自律性崇拜であると一蹴されたということ、美術畑出身の委員が批判されている同僚の画家たちを救おうとして、ナチ時代で墮落者として追放されたことを理由にあげると、ウルブリヒトは「ヒトラー以前にも墮落者はすでにいた」と平然と口を狭んだことなど中央委第五回会議では芸術、文学の領域の代表者たちは形式主義排撃者と対決し、説得しようのような状況にはもはやいなかったのが実状である。それ故文学史のベッヒャーの引用は実状を半分しか伝えてい

文学史記述の配慮の第二は「十九世紀のブルジョア・リアリズムに基づくゲオルク・ルカーチ (Georg Lukács 1885—1971 ハンガリーの哲学者、文学史家) のリアリズム構想がそのような解釈を促進した」と述べている点である。これはブレヒトのような権威までが、形式主義的と非難され被害を受けたことに対する弥縫策ではないかとおもわれる。文学理論上ではブレヒトとルカーチが対立していたことは確かである。一方ルカーチは五六年ハンガリー暴動が起きたとき反革命政府の高官であった。暴動はソ連軍の進駐により鎮圧されたが、ルカーチは事件の責に連座し、以後マルクス・レーニン主義の正統派から排除された。東独においてもルカーチの弟子である哲学者ハーリヒ (Wolfgang Iser 1923～) とそのグループが国家に反逆する共同謀議のことで捕縛された。またルカーチ理論を継承発展させた文学史家マイヤー (Hans Mayer 1907～六四年西独移住)、哲学者ブロッホ (Ernst Bloch 1885～六一年西独移住) も修正主義者として攻撃された。いわゆる修正主義論争においてはじめて生じたルカーチ排撃とブレヒトとの対立が簡単に結びつけられている。ルカーチとブレヒトの対立は三〇年代の後半にまで溯る。ルカーチのリアリズム論は実際に創作するブレヒトの立場から見ると、労働者階級の生活を反映しない現実離れしたものに映った。しかしマルクス主義正統派の公認する社会主義リアリズムは理論的には曖昧で一種のスローガンにすぎなかったので、ルカーチの精緻なりアリズム構想はマルクス主義美学と文芸論の発展に大いに役立った。特に戦後から五〇年代前半まで東独の文学研究者に圧倒的影響を与えた。しかしルカーチとブレヒトの理論上の対立は形式主義論争にそれほど大きな位置を占めてはいない。党のインテリ層でみな幹部級であったハーリヒ・グループが国家秩序を擾すグループでないことを示す声明の中で「われわれのイデオロギー的發展には同志ゲオルク・ルカーチが特別な影響を与えた。ベルトルト・ブレヒトは死ぬまでわれわれのグループに共鳴し、党内の健全な勢力と見做していた」と言っているところを見ても

明らかである。また順序は逆になるが、五三年三月スターリンが死亡し、六月にはベルリン暴動が発生した。直接には労働者のノルマ引き上げが原因であったが、これもソ連軍の進駐で威圧された。政府は経済政策の新路線を宣言した。その頃ハリーヒは新聞に寄稿して、文化政策の領域においても「自由な雰囲気を作り出し不満の種を取り除く処置」⁽⁴⁾がなされねばならぬと提案し、不利を蒙った芸術家たちの例を挙げ、その責を芸術問題委員会に厳しく問うている。これらの事実からルカーチとブレヒトの理論上の対立が形式主義排撃に深く影響したとは考えられない。

ブレヒトの場合を見るとそれが一層はつきりしてくる。文学史はブレヒトが末期ブルジョアの芸術と文学の中にある見せかけの新しいとナチ時代には社会体制そのものが形式主義であったことを鋭く分析し、一方では芸術活動における形式の意義と重要性を弁護し、形式主義排撃の行き過ぎを是正したと指摘している。しかし「ルクルス(5)の訊問」を書き換えたのは正しい批判を受入れたのであり、アイスラーの「ヨーハン・ファウストゥス」についてもドイツ史を悲惨に描くことに反対する批判にはブレヒトも賛成している点を挙げている。なお、反ナチの連帯のために伏せられていた三十年代のルカーチとの論争を纏めて五五年に出版したことを述べ、最後に国民賞第一級が形式主義論争のピークであった五一年に授与され、ブレヒトの評価に揺ぎがなかったことを強調している。しかし当時のブレヒトの論文やノートを見ると、論争が純粹に文学理論上の問題ではなく、政治の介入であったことを示している。たとえば「芸術はお役所の芸術観を芸術作品に置き換える能力はない。寸法に従って仕上げられるのは長靴だけである。それに政治の学習を良く受けた多くの人々の趣味は歪んでおり、したがって規準にはならない」⁽⁶⁾。政治の干渉をはっきり拒否している。また「芸術家にとってまったく収獲にならない、いや憤激をもたらすのは、人民と自分自身の間を明確に区別してみたり、不明瞭に区別したりする類の形式主義排撃者の態度である。かれらは芸術作品が自分自身に与える

効果を決して言わず、常にその人民に与える効果を語る。かれら自身は人民に属していないように見える。そのかわり人民が何を欲しているかよく知っている、かれらが欲していることを人民は欲しているということで人民を見分けるのである。『それを人民は理解しない』、とかれらは言う。芸術家は訊ねてみる、『さみはそれを理解したのか？』そうでなければどうかきみはそれを理解しなかったと言ってくれたまえ、ばくはきみを証人と認めてもよい』。こういう連中は人民を高く評価しながら実際にはまったく貶めているのだ⁶⁴。政治権力の官僚的介入に対する痛烈な批判である。形式主義論争は五三、四年で終息している。誤った形式主義排撃の責を取って検閲制度は解体(五三年)され文化省が新設(五四年)されて初代大臣にベッヒャーが就任している。ブレヒトはこれに希望を抱いているいろいろ助言したといわれる。しかし前述したように五六、七年には修正主義論争が起こり大量の入獄者を出している。文化政策がどれほど変化したかはこれによって想像しうる。五一年より第一次五カ年計画、続いて第二次が実施され企業の国営化は進み農業の集団化も六〇年頃には完了する。社会主義国家建設を至上命令とする国家権力の立場から見れば芸術学が政治に従うことは当然であったかもしれないが、芸術家、作家たちにとっては大きな試練である。五三年のベルリン暴動については文学史は触れていない。おそらく今日でもまだタブーであろう。ブレヒトがこれについて書いたものがある。ソ連軍の進駐は西側の挑発防止のために労働者向けではない。労働者のストライキに始まる暴動は一連の政府の誤った行政処置にあるというのがブレヒトの立場である。「六月一七日(五三年)以前と第二〇回(ソ連の)党大会五六年二月後の人民民主主義においてわれわれは多くの労働者と同時に主として芸術家にある不満を体験した。この気分は同一の源から発していた。労働者は生産を高めるために駆り立てられ、芸術家はそれをおいしくするために駆り立てられた。芸術家の生産も労働者のそれも目的のための手段の性格を帯び、自分自身のうちが楽しいと

か自由であると思倣されなかった。私の考えでは社会主義の立場から手段と目的、生産と生活水準というこの分離を止揚しなければならぬ。われわれは生産を本来の生活内容にし、生産それ自体が心をそそるものであるように生産を創作し、それに多くの自由と種々な自由を具備させなければならぬ」。ブレヒトは五六年八月にこの世を去った。ソ連の非スターリン化とハンガリー暴動(十月)の間である。おそらく最後の言葉であつたらう。反ファシズムの闘士として、社会主義文学の第一人者として東西を問わず死後も敬意を払われているが、晩年は社会主義国家の中で政治と文学の新たな矛盾の試練を受けなければならぬ。

- (1) Elinar Schubbe : Dokumente zur Kunst-, Literatur- und Kulturpolitik der SED, Seewald Verlag 1972 S.55
- (2) Konrad Franke : Die Literatur der Deutschen Demokratischen Republik, Kindler Verlag 1971 S. 14
- (3) a. a. O. S. 15
- (4) a. a. O. S. 17
- (5) a. a. O. S. 25
- (6) Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung Bd. 7 Dietz Verlag 1966 S. 329 f.
Hermann Weber : DDR Grundriß der Geschichte 1945-1976, Pabelträger Verlag 1976 S. 37
- (7) Konrad Franke : ebenda S. 27
- (8) a. a. O. S. 28
- (9) Elinar Schubbe : ebenda S. 175 ff.
- (10) Bertolt Brecht : Kosmopolitismus, Gesammelte Werke 19 Suhrkamp Verlag 1967 S. 530
- (11) Horst Haase und andere : Literatur der Deutschen Demokratischen Republik, Volk und Wissen Verlag 1976 S. 206 f.
- (12) Elinar Schubbe : ebenda S. 225
- (13) a. a. O. S. 187

- ㉔ Hans-Dietrich Sander : Geschichte der schönen Literatur in der DDR. Rombach Verlag 1972 S. 107
 ㉕ Eilmar Schubbe : ebenda S. 108
 ㉖ Bertolt Brecht : Über Formalismus und neue Formen. Gesammelte Werke 19 Suhrkamp Verlag 1967 S. 527
 ㉗ Horst Hase und andere : ebenda S. 210
 ㉘ a. a. O. S. 210
 ㉙ Hans-Dietrich Sander : ebenda S. 108
 ㉚ Horst Hase und andere : ebenda S. 210
 ㉛ Konrad Franke : ebenda S. 84
 ㉜ Eilmar Schubbe : ebenda S. 192
 ㉝ Bertolt Brecht : Was haben wir zu tun? Gesammelte Werke 19 S. 545
 ㉞ Bertolt Brecht : Notizen über die Formalismuskussion. Gesammelte Werke 19 S. 528
 ㉟ Bertolt Brecht : Zum 17. Juni 1953. Gesammelte Werke 20 S. 3775

黨 艦

- DDR = Deutsche Demokratische Republik (ドイツ民主共和国)
 BRD = Bundesrepublik Deutschland (ドイツ連邦共和国)
 KPD = Kommunistische Partei Deutschlands (ドイツ共産党)
 SPD = Sozialdemokratische Partei Deutschlands (ドイツ社会民主党)
 CDU = Christlich-Demokratische Union (キリスト教民主同盟)
 FDP = Liberal-Demokratische Partei (自由民主党)
 SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands (ドイツ社会主義統一党)
 NDPD = National-Demokratische Partei Deutschlands (ドイツ国家民主党)
 DBD = Demokratische Bauernpartei Deutschlands (ドイツ民主農民党)
 FDGB = Freier Deutscher Gewerkschaftsbund (自由ドイツ労働組合同盟)
 FDJ = Freie Deutsche Jugend (自由ドイツ青年団)

D F D = Demokratischer Frauenband Deutschlands (ドイツ民主婦人連盟)

K B = Kulturbund (文化同盟)

Vdg B = Vereinigung der gegenseitigen Bauernhilfe (農民相互扶助会)